

野田村支援・交流活動報告（2011年10月15日）

今回の野田村でのボランティア・交流活動は、55名の参加があり、久しぶりに大人数となりました。参加者の内訳は、学生41名、市民13名、教員1名（男女比18:37）でした。

参加者数と学生の割合が多かった理由は、弘前大学の後期開講の教養科目「東日本大震災復興論」で、3回の災害ボランティア参加が履修要件として課されたことにあり、参加学生の大部分は初の野田村行きでした。行きのバス車内での自己紹介によれば、以前から災害ボランティアや被災地の復興に関心を持っていたところ、上記講義の開講を契機に野田村行きを決意した学生がほとんどで、震災復興への潜在的な関心の高さを表していました。

低気圧が北上中で、前夜から雨が降り、天候が心配されましたが、8時過ぎの弘前大学集合時に雨は止み、活動中も曇天で比較的暖かく、傘なしで活動できたことは幸いでした。



補助席も一杯のバス車内



道の駅おおの前にて

野田村に入ると、「かまどのつきや」に直行し、NVNAD（全国災害救援ボランティアネットワーク）メンバーと渥美先生の計16名（ほとんどが関西地方の大学生）とともに、昼食のお弁当をいただきました。渥美先生の食事前のご挨拶では、今回の活動で野田村に関心を持った学生には継続的に支援、交流に取り組んでもらいたい旨などが語られました。



かまどのつきやに入るボランティアたち



渥美先生のお話

時間の関係で、昼食後は慌ただしく村役場前へ移動し、13時から、消防署前の広場でのペットボトルロケット打ち上げ（子どもとの交流）、郵便局近くのスペースでの押し花と、野田中学校グラウンド仮設住宅でのお米配布（NVNAD 企画への参加）の3つのグループに分かれて活動しました。ボランティアの希望に応じて分かれた結果、それぞれ、12名、14名、26名の参加がありました（その他に、チーム北リアス現地事務所で作業にあたり（岩手大学と連携に向けた協議を行ったとのこと）、カメラマン役を務めた学生もいました）。

以下、ペットボトルロケット、押し花、仮設住宅回りの各担当者の報告を掲載します。

① ペットボトルロケット（この部分のみ執筆担当：田上晃央）

男性5名、女性7名の計12名で活動しました。場所は岩手銀行の裏で行いました。はじめは、子供たちはいませんでしたが、とりあえず製作に取りかかりました。まず、3人のグループを4つ作ってそれぞれ1つずつ計4つのペットボトルロケットを作りました。経験者が1人しかいなかったのですが、みんな説明書を読んで手際よく作っていました。

製作中に、子供が2人来てくれて一緒にロケットを作りました。子供たちにカッターなどは持たせられないので、ポケモンの絵を書いてもらい、ペットボトルロケットが完成。そして、水と空気を入れて発射しました。

予想以上に飛んで、子供たちはとても喜んでいました。飛びすぎて川に落ちてしまい、流されて取りに行くのが大変でした。途中でもう1人増えて、計3人の子供が参加してくれました。そして、15時まで飛ばし続けて無事終了。感想としては、もう少し子供に来て欲しかったです。

② 押し花（この部分のみ執筆担当：南部真人）

弘前から12人と野田村の方10人ほどで「素敵な押し花を作ろう」という企画を行いました。弘前から参加した押し花の先生が5人ほどおり、押し花用の紙や抹茶とお菓子、童謡の歌詞がいくつか載った本を持ってきて下さっていました。まずはみんなで街に繰り出します。道ばたに生えている草や花を採取するためです。鍼灸院だった場所を貸していただき、そこで摘んできた草や花を押し花用の紙にはさんでいきます。

はさみ終えて、先生が持ってきた抹茶とお菓子をいただきながら童謡を何曲かみんなで歌いました。みんな楽しんでいる様子で、初めて飲んだお抹茶は風情があって大変美味しかったです。先生によると押し花が出来上がるのは3、4日後らしいです。みんな出来上がった押し花でしおりやはがきを作るのを楽しみにしていました。

③ 仮設住宅でのお米配布

被災者との交流を希望する方が多かったものと思われ、もっとも参加者の多いグループでした。12班に分かれて、NVNADの指示に従い、100戸強の仮設住宅を、関西の大学生を含む2、3人の組で回り、お米を配布するとともに会話を交わしました。「ゆきむすび」という宮城県の鳴子温泉でとれた「鳴子の米プロジェクト」のお米で、生育条件の良くない山間地で作られたため、被災地の方も一緒に頑張りましょう、というメッセージが込められているとのことでした。うるち米ともち米の性質をあわせ持つ低アミロース米のため、通常よりも1割くらい水を減らすと美味しく炊ける旨を、配布の際にお伝えしました。



NVNAD の方に説明を受ける



お米を受け取る



ゆきむすび表面



ゆきむすび裏面

ゆきむすびを携えて、班別に指定された仮設住宅の棟に向かい、配布を開始しました。訪問した仮設住宅では、お米について説明した後、1戸につきお米 2 袋を配布します。お宅により、掃除中で掃除機の音のためなかなか声掛けに気づいてもらえず、またお留守のところもありましたが、ご在宅の方にはいずれも快く受け取っていただけました。あわせて NVNAD が集会場で翌日開催する「健康体操と茶話会」の告知チラシも配布しました。

訪問したあるお宅は、お婆さんの一人暮らしで（親族は別の仮設住宅にお住まい）、お米を渡し、玄関先から見た山盛りの粟についてお尋ねしたことをきっかけに、長い間お話を伺いました。津波で家を流され、避難所生活を経て仮設住宅に入居された方で、お話ぶりは明るくお元気でしたが、この生活が夢（嘘）だったらとしばしば思う、海はもう見たくないし近づきたくない、といったお言葉からは、いまだ精神的ショックを受けておられることが伝わりました。これまでは近くの借りた土地で農作物を作ることが気晴らしになっていたものの、雪が積もるとそれもかなわず、来春まで暇になって困る、散歩でもしようかな、ともおっしゃっていました。さらに、あのとき津波に飲まれていれば周りの人に迷惑をかけずに済んだのに、と笑顔で語られたときは、おかけする言葉に詰まりました。

15 時を告げる放送が流れて、仮設住宅の上方にあるスタート地点に戻ると、お米を配り終えたボランティア学生と仮設住宅の子どもたちが遊んでいました。キャッチボールをしたり、ボランティアの肩に乗ったりと、以前の野田村復興イベントや移動おもちゃ館のときと同様で、子どもは無邪気です。お別れの時間が来て、子どもたちは、名残惜しそうですが、再会を約束して、仮設住宅へ続く階段をかけ下りていきました。



仮設住宅の子どもたちと遊ぶ



お別れ

帰りのバス車内で、各参加者からは、総じて、楽しかった、良い経験になった、という感想が聞かれました。今回は、被災地に足を運んだこと自体が初めての学生が多く、被災状況を目の当たりにし、被災者の方と相對して、感じるどころが多々あったものと思われる。別れ際に子どもたちが悲しそうな顔をしていたのが印象的だった、「次いつ来るの」と押し花作りで尋ねられた、仮設住宅で「いっぱい話を聞いてくれてありがとう」と感謝された、などの声のあった一方、役に立てたのかは疑問に思った、緊張して被災者の方と満足に会話できなかった、子どもと遊ぶ準備が足りなかった、という意見もありました。活動の中心は、瓦礫撤去等の支援から交流に移行しつつあります。初めは慣れず、役立った実感や達成感も少ないかもしれませんが、適切な振る舞いをする限り、被災地に赴き、現地の方と関わり、子どもと楽しく遊び、親しむことも、ボランティアと言えるでしょう。

押し花グループに参加した学生からは、近くへ花を摘みに行った際に、花も木も家も津波で流されて少なくなった、海岸に植えた松の木が流された、一緒に過ごしてきたものがなくなった、などの住民の語りから、悲しさや寂しさがかなり伝わってきて、心の傷はまだ残っていると思われる、などの感想がありました。仮設住宅でのお米配布の参加者からも、こうなる前に亡くなりたかったとお婆さん（上記とは別の人）から聞いた、笑顔で「家が津波で流された」と言われてつらかった、どう声をかけたら良いか分からなかった、居住者の笑いの中に厳しさを感じた、冬は水道管が凍るため水抜きが必要だがトイレが使えなくなる問題がある、以前の同じ地域出身の人同士で交流はあるものの近所付き合いは必ずしもうまくいっていないように映った、腰の悪いお爺さんがいて周囲の協力がなくて生活は難しく思えた、寒さの中で孤立化が進みそうで私たちも真剣に考えないと死んでいく人が出かねない、継続して「必ず来るよ」と示すことが重要だと思った、安易なことではできないが寄り添うような活動をしていきたい、などの真剣な思いが口々に語られました。

被災者の思いを尊重しながら、私たちが弘前から何ができるのかは、大きな課題として残されています。また、先の報告にあったペットボトルロケットに参加した子どもの少なさについては、告知が十分でなかったことに加えて、近くで同時間帯に別のこども関連の催しがあったためと後に分かり、事前に現地企画等の情報を調べておく必要がありました。押し花作りは、結果的に実りある交流活動になったものの、作成方法と参加者の人数について双方に思い違いがあったことから、情報の共有化も今後の課題と言えるでしょう。

(担当 飯考行、南部真人、田上晃央)